

報 告

第 118 回 (平成元年度秋季) 講演大会記事

第 118 回講演大会は平成元年 9 月 29 日から 10 月 1 日まで北海道大学教養部で開催された。

開会式・表彰式

9 月 29 日午前 9 時 30 分から教養部大講義室において開会式、表彰式が行われた。式は木下副会長兼専務理事司会により、はじめに高橋忠義実行委員長 (北海道大学名誉教授) および八木靖浩会長挨拶が行われた。

八木会長挨拶

本日ここに、諸先輩をはじめ会員諸兄と共に社団法人日本鉄鋼協会第 118 回講演大会を開催いたしますことは、私の最も喜びとするところであります。北海道支部における講演大会は、昭和 57 年に札幌市で開催して以来 7 年ぶりのことであり、通算 9 回を数えます。

このたびの講演大会開催に当たりましては、北海道大学当局のご理解により多くの会場をお借りすることができ、誠に光栄に存じております。

また、高橋忠義大会実行委員長をはじめ二川哲雄北海道支部長、大会実行委員および関係者各位のご努力により本日を迎えることができましたこと、ここに会員を代表して厚くお礼申し上げます。

おかげさまで、今回の講演発表件数は討論を含め 980 件であり、この数は過去最高であります。また論文の内容は基礎から応用さらに萌芽・境界技術にわたり将来への意欲が伺われ、ご同慶に堪えないしだいでもあります。

つきましては、本日から三日間の講演大会が、会員諸兄にとって極めて有意義でありますよう祈念いたします。

本会では毎年、秋季講演大会に際し、各分野の業績により浅田賞、三島賞、林賞ならびに山岡賞の表彰を行っておりますが、本日受賞されます皆様のご業績に敬意を表すると共に心からお祝い申し上げます。

後ほど、加藤勉殿と木村守弘殿には、浅田賞受賞記念特別講演をお願いいたしておりますので、皆さんのご聴講をお願いいたします。

さて、本年度の大きな事業の一つとして「亜鉛および亜鉛めっき表面処理鋼板」国際会議をご紹介します。

この国際会議は久松敬弘実行委員長および実行委員各位のもとに、今月 5 日から 7 日まで東京・経団連会館にて開催いたしました。この分野における生産・需要両面で世界の注目を集めているわが国での、会議開催と

あって、参加者数は予想を大きく上回り、21 か国から約 400 名、発表論文数は 78 件を数え、充実した討論が展開され、参加者から好評を得ました。引き続き行われました工場見学会も、自動車・鉄鋼各社のご協力によって、延べ 400 名に及ぶ開かれた見学会となり盛会裡に終了いたしました。また、11 月 20 日から 23 日までの 4 日間は、高村仁一実行委員長および委員各位のもとに「材料評価に関する国際会議」を神戸国際会議場にて開催を予定しております。更に 12 月 5 日・6 日の 2 日間、中国・上海市において開催される「第 5 回日本・中国鉄鋼会議」には、森田善一郎団長以下 20 名の代表団の派遣を予定しております。

このように、鉄鋼を取り巻く科学技術の交流は国際的にも国内的にもますます関心が高まっており、一方、わが国経済動向は個人消費・設備投資とも内需を中心に引き続き増勢を示しておりますので、平成 2 年度の予算編成に当たりましては、より充実した諸事業が遂行できるよう努力いたしたいと存じますので、理事・委員各位のご協力を期待するしだいでございます。

今後とも、会員各位のたゆまぬご研鑽をお願いいたしまして私のご挨拶といたします。

つづいて浅田賞・三島賞・林賞・山岡賞の各賞の表彰が行われた (各賞理由は別記掲載)

特別講演会

表彰式につづいて次の浅田賞受賞記念講演が開催された。

「高性能鋼材の高層建築への適用」

東京大学工学部教授 加藤 勉殿

「耐熱セラミックスとしての耐火物—現状とこれから—」

品川白煉瓦(株)専務取締役 木村 守弘殿

講演大会

今秋の講演数は製鉄部門 102 件、製鉄・製鋼共通部門 97 件、製鋼部門 102 件、萌芽・境界領域部門 110 件、加工・システム・利用技術部門 176 件、分析・表面処理部門 91 件、材料部門 249 件、計 927 件の研究が 21 会場にて発表され活発な討論がなされた。

討論会

一般講演の他に次の 5 テーマ (講演 73 件) の討論会が行われた。

1. コークス炉における乾留反応と制御

座 長 持田 勲 (九大)

副座長 西岡 邦彦 (住金)

2. 偏析制御の現状と将来展望

座 長 高橋 忠義 (元北大)

副座長 安中 弘行 (神鋼)

3. 箔製造技術の現状と問題点

座 長 川並 高雄 (金工大)

副座長 高橋 洋一 (神鋼)

4. 気相めっき討論会

総合司会 三吉 康彦 (新日鉄)

5. TMCP の特殊鋼および高炭素鋼への適用

座 長 志賀 千晃 (川鉄)

副座長 勝亦 正昭 (神鋼)

懇親会

懇親会は9月29日午後6時より京王プラザホテル札幌で日本金属学会と合同で開催された。

二川哲雄副実行委員長(新日本製鉄(株)室蘭製鉄所副所長)の司会により、高橋実行委員長、八木本会会長、堂山金属学会会長、佐藤北大工学部長挨拶の後、大西敬三副実行委員長((株)日本製鋼所室蘭製作所副所長)の乾杯で始められた。

参加者は360名ほどで秋の庭に懇談が行われた。最

後に菅原英夫副実行委員長(室蘭工業大学教授)の万才三唱で散会した。

ジュニアパーティー

9月30日午後6時より札幌の繁華街にある羊々亭にて開催された。多数の参加者があったが、会場の都合で定員270名で打ち切られたため、参加できない人がでた。

参加者はジンギスカン鍋など北海道の味を堪能しながら懇談が行われた。

欠講

今秋の大会において次の講演が欠講された。

1. No. 514 樹脂充填高力ボルト接合部に関する実験的研究(せん断型引張実験-1) 新日鉄 宇野 暢芳他
2. No. 679 ラインパイプ鋼の強度・靱性バランスに及ぼす熱間圧延の影響 新日鉄 飯野 牧夫
3. No. 751 熱調質に代わる炭素鋼製大形部品の熱水焼入れ 中国湘潭大学 譚 玉華 他

コ ラ ム

論文の考察って何?

テレビの番組で“こんなモノいらない“というのがありますが、論文の考察について考えてみませんか。

考察についてちょっと考えてみただけで次のような愚問が浮かんできます。

- 考察は、何のためにあるのか。
- 考察は、いつの頃に論文に現れたのか。
- 考察は、著名な論文に必ず付いているか。
- 考察は、Letters to editor に付いていないのか。
- 考察は、発明、発見には付いていないのか。
- 論文に考察がなかったら……とか。

このようなことを暇にまかせて考えていましたところ、では一体、考察が論文の中に占める割合が知りたくなりました。そこで、金属関係の代表例として我が“鉄と鋼”と“Metallurgical Transactions A”の今年の6月号の論文について調べてみました。表題、アブストラクトを除いて本文に占める考察の面積の概算をしてみました。実験結果と考察が一緒になっているものについては、それぞれに折半しました。結果として

“鉄と鋼”では最少は19%で最大66%，“Metallurgical Transactions A”では、それぞれ、21%と72%でした。平均では、前者は、およそ40%、後者は45%でした。あえて独善的な結論を申し上げると、論文から考察を省けば、本の厚さは4割減あるいは4割プラスの論文が掲載できます。または査読時間が短縮され、早期出版が望めます。乱暴な話であることを承知の上で一石を投じましたが、下記のような議論もあることを参考に加えておきます。

“あらゆる科学論文が同一の様式であるのは、普遍的な科学的方法から発しているように見えるが、実は科学論文に流布している誤った一致によるものである。もし科学者がその実験や理論をごく自然に表現することが許されるなら、唯一の普遍的な科学的方法という神話はたちどころに消え失せてしまうであろう。”(背信の科学者たち [ブロード、ウェード著/牧野賢治訳, 化学同人])

結論、このような駄論を展開させるような論文がないことを期待します。

(金属材料技術研究所 石川圭介)